

「教育臨床総合研究11 2012研究」

幼稚園施設整備指針の改訂とこれからの幼稚園施設

Revision of the guidelines for the construction of kindergarten facilities development guidelines and the kindergarten facilities in the future

町田 佳菜子* 正岡 さち*
Kanakano MACHIDA Sachi MASAOKA

要 旨

平成22年2月に幼稚園施設整備指針が改訂された。社会の変化等に合わせて幼稚園施設も変化が見られるようになった。そこで、幼稚園施設整備指針の改訂の観点を具体化している幼稚園の事例をもとに、今後求められる幼稚園の施設整備について考察を行った。

〔キーワード〕 幼稚園施設、幼稚園施設整備指針改訂、幼稚園教育要領改訂、園舎、園庭

I 緒言

近年、社会の激しい変化に合わせて、子どもの生活も大きく変化していると言われている。そのため、幼稚園での生活も変化していると考えられる。それに合わせた幼稚園施設設備が求められてきていると考えられる。平成22年2月、文部科学省において幼稚園施設整備指針が改訂された。改訂を受け、その観点を踏まえた幼稚園施設が設置されてきている。

そこで、幼稚園施設整備指針の改訂について及び改訂の観点を踏まえた幼稚園施設についての知見を得ること、また、現在の幼稚園施設の課題について明らかにすることによって、子ども達の健やかな成長のための望ましい幼稚園施設のあり方を考える資料とすることを目的として研究を行った。

II 幼稚園施設整備指針の改訂の背景

幼稚園施設設備指針の改訂の背景には、幼稚園教育要領の改訂と社会状況の変化の2つがある。

1つ目の要因である幼稚園教育要領であるが、平成20年3月に公示され、平成21年度より子どもたちの「生きる力」の基礎をより一層育むことを目指し、幼稚園教育要領改訂¹⁾が実施された。「生きる力」とは自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他

* 島根大学教育学部・人間生活環境教育講座

人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を持つことである。改訂の概要は、幼小の円滑な接続や体験の多様性、関連性の重視や保護者と連携した幼児教育への理解推進、子育て支援と預かり保育の充実である。具体的に改訂された項目は「自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること」という項目が「健康」の領域の内容の取扱いで追加されたり、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」が「環境」の領域の内容の取扱いで追加された、などがある。

2つ目の要因である子どもを取り巻く社会の変化であるが、少子化、核家族化、情報化、国際化などによる人々の価値観や生活様式が多様化している一方で、人間関係の希薄化、地域における支援的なつながりの希薄化、過度に経済性や効率性を重視する傾向などがある²⁾。このような社会状況が、地域社会などにおける子どもを取り巻く環境や家庭における親の子育て環境を変化させている。また地域社会などにおいて、少子化、核家族化の進行により子ども同士が集団で遊んだり、葛藤したりしながら互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。都市化や情報化の進展によって、テレビゲームやインターネット等の遊びなど偏った体験が増加している。さらに、核家族化や地域における支援的なつながりの希薄化により、児童相談所における虐待に関する相談件数も増加している。

以上のことを踏まえて平成22年2月に幼稚園施設整備指針が改訂された。

Ⅲ 幼稚園施設整備指針の改訂のポイント

幼稚園施設整備指針の改訂によって新たに加えられた観点は7点である³⁾⁴⁾。

1. 多様な生活体験が可能となる環境の整備
 - (1) 緑化スペースを園地全体に積極的かつ効果的に取り入れた施設計画
 - (2) 変化に富み、遊びながら様々な活動を体験できる園舎・園庭
2. 家庭や地域と連携した施設整備の充実
 - (1) 地域の幼児教育センターとしての役割や機能を一層充実した施設計画
 - (2) 長時間園内に滞在することに配慮した、預かり保育のための空間
3. 幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続への対応
 - (1) 近隣の小学校の児童等との交流に配慮した施設計画
4. 子どもの体力向上のための空間
 - (1) 屋内外の空間的な連続性や回遊性に配慮した園庭の計画や遊具の配慮
5. 情報環境の充実
 - (1) 必要に応じ、幼児の興味・関心を広げたり、公務情報化を推進したりするために、情報機器の導入が可能となる施設計画
6. 特別支援教育の推進への配慮
 - (1) 個々の障がいの状態に応じた多様な活動に柔軟に対応でき、ゆとりをもってかかわるこ

とのできる施設計画

7. 環境面からの持続可能性への配慮

(1) 環境負荷の低減や自然との共生等を考慮し、教材としての活用に念頭においた施設計画

IV 幼稚園施設整備指針の改訂の観点の具体化

上記の新たな幼稚園施設整備指針³⁾の主な改訂内容である7つの観点を、すでに具体化して取り入れている幼稚園がある。「文部科学省委託事業 幼稚園、小学校及び中学校施設整備指針改訂に関わる事例集検討委員会」⁴⁾は幼稚園5園を選定した。そこで、観点を具体化した園について、7つの観点への具体的対応を見ていく。また、より詳細に具体的対応を理解するため、上記の5園に加えて「新建築（新建築社）」で1998年から2012年までに取り上げられた幼稚園施設の中からも取り上げていく。

1. 多様な生活体験が可能となる環境の整備

(1) 緑化スペースを園地全体に積極的かつ効果的に取り入れた施設計画

四街道さつき幼稚園（千葉県）⁵⁾では「ふれあいの森」と言われる既存の竹林を生かした園庭を設置している。「ふれあいの森」は、「森のエリア」・「草原のエリア」・「水辺のエリア」・「農のエリア」があり、様々な自然体験が出来るように整備されている。「森のエリア」には、栃やオニグルミの木などがあり、四季の変化を感じることができたり、木の実を利用して遊ぶことができたりすると考えられる。「草原のエリア」では、バッタなどの生き物を見つけることができる。「水辺のエリア」ではメダカやヤゴなどの生き物を観察することができる。「農のエリア」では花壇・菜園・田んぼがあり、米の収穫等を体験することが出来る。このように四街道さつき幼稚園の園庭では園全体で緑化スペースを取り入れており、多様な体験をすることができると思われる。

また、錦陵幼稚園（京都府）⁶⁾では、ビオトープ⁷⁾が設置されている。ビオトープとは、生命（バイオ：bio）と場所（トポス：topos）の合成語で、生物の生息空間のことをいう。本来は自然環境そのものがビオトープであるが、人間によって再構成された自然環境もビオトープというようになった。このビオトープで幼児は生物の観察を行ったり触れ合ったりと自然体験をすることができる。

(2) 変化に富み、遊びながら様々な活動を体験できる園舎・園庭

中島村立中島幼稚園（福島県）⁴⁾の園舎では、ロッククライミングや木登りが出来る遊び空間と、絵本が読める空間とが隣接している。中島幼稚園は寒い地方にあるため、屋内での活動を多様化させている。屋内にロッククライミング等を整備することによって、腕力・脚力・バランス感覚などが養われる。また、2つの空間を隣接させることによって、興味・関心に応じて遊ぶことができたり、興味・関心を広げることができたりすると考えられる。

高千穂幼稚園（東京都）⁴⁾では、保育室に子どもの“舞台”となりうる段差が作られており、保育の中では発表会の練習に使われたり、遊びの中で劇をしたりなど、子どもが舞台気分・主役気分を感じることが出来るような場が設けられている。また、出保育室内から園庭を見渡すことのできる大きな窓が設置されており、園庭への興味が拡がる工夫がされている。

2. 家庭や地域と連携した施設整備の充実

(1) 地域の幼児教育センターとしての役割や機能を一層充実した施設計画

四街道さつき幼稚園（千葉県）⁴⁾では幼稚園内にベンチを設置している。園内にベンチを設けることで、送り迎えの際に保護者同士で悩み相談や情報交換をすることができ、保護者同士で関わりをもつことができる。にまた、ふじようちえんでは園内にカフェやランチルームを設けて、親子のコミュニケーションをとる場として活用している。

(2) 長時間園内に滞在することに配慮した、預かり保育のための空間

中島村立中島幼稚園（福島県）⁴⁾中島幼稚園では預かり保育のために、畳の午睡室を設置している。午睡室は年中や年長の保育室から離れたところに設けられているため、静かな環境で午睡をすることができる。また昭和保育園では0歳から3歳までの子どもの居る1階を鉄筋コンクリート造に、4・5歳児の居る2階を木造の混構造にしている。昼寝などの生活時間が異なるため、上下階での音や振動を遮ることができる。

3. 幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続への対応

(1) 近隣の小学校の児童等との交流に配慮した施設計画

郡上市立はちまん幼稚園（岐阜県）⁴⁾では「お遊び回廊」と保育室を一体にして小学生等との交流スペースを作っている。郡上市立はちまん幼稚園の保育室は大きな引き戸となっており、解放できるため、スペースを確保することが出来る。「小1プロブレム」と呼ばれる問題によって幼・小との円滑な接続が重要視されてきている中で、小学生と関わることのできるスペースを確保し、交流することで幼児の小学校への理解・関心を深めたり、親しみを持ったりすることができると考えられる。

4. 子どもの体力向上のための空間

(1) 屋内外の空間的な連続性や回遊性に配慮した園庭の計画や遊具の配慮

ふじようちえん（東京都）⁴⁾の園舎は楕円形になっている。この園舎は行き止まりがないため、走りまわることができ、体力の向上につながる。さらに、自然の樹木を生かした遊具や園庭に通じる滑り台など、遊ぶ中で体力の向上が出来るような工夫がされている。また、四街道さつき幼稚園では、下足のまま園舎と園庭を自由に移動できる屋内廊下が設置されているため、遊び空間を広げることができる。

5. 情報環境の充実

(1) 必要に応じ、幼児の興味・関心を広げたり、公務情報化を推進したりするために、情報機器の導入が可能となる施設計画

文京学院大学ふじみ野幼稚園（埼玉県）⁴⁾ではホールにプロジェクターを設置し、映像を教材として利用している。スクリーンに流れる円増に合わせて身体を動かしたり、ダンスの練習をしたりすることができる。ホールの設計は、吸収材を用いたり、保育室との配置関係を工夫したりするなど、音環境に配慮している。また、高千穂幼稚園では保護者を対象に、イベント情報や子育て支援情報、不審者情報などを携帯電話等に配信している。このように情報環境を

充実させることによって社会の変化に対応して、施設や取り組みを工夫している。

6. 特別支援教育の推進への配慮

(1) 個々の障がいの状態に応じた多様な活動に柔軟に対応でき、ゆとりをもってかかわることのできる施設計画

高千穂幼稚園（東京都）⁴⁾では、保育室内に「デン」⁸⁾という空間を設置している。デンとは仕事や娯楽のためにひきこもるための小部屋である⁸⁾。高千穂幼稚園では自閉症、ADHD等の障がいのある幼児を落ち着かせる空間として利用している。また、同幼稚園では障がい者用の手すりを設置した便所やエレベーターなども設置して、障がいのある幼児、職員等が生活を送るやすくするための設計がされている。

7. 環境面からの持続可能性への配慮

(1) 環境負荷の低減や自然との共生等を考慮し、教材としての活用に念頭においた施設計画
ふじようちえん（東京都）⁴⁾では空気層を利用した快適な室内環境を構成するための設計がされている。ウッドデッキ下の空気層があることによって、直接日光が当たって暖かい空気を空気層にためることができ、天井断熱材によって室内への熱を遮断することが出来る。そのため、夏季は室内の温度上昇を減らすことができる。また、保育室は園庭にそって開け放つことができるため、風の通り道が出来る。

いわき幼稚園（福島県）⁹⁾の施設は内部でありながら外部のような環境を作り出している。室内環境を空調等でコントロールするのではなく自然の環境を利用する工夫をしている。この幼稚園施設は平屋建てであるが、年齢ごとに3つの軸を設けてそれぞれの間に太陽の光が入るようなテラスを作っている。また風が通り抜けられるように解放できる引き戸を保育室等で利用している。南向き、西向き、東向きとそれぞれ異なる屋外環境を作り出しているため、年齢ごとに分けられた園舎では季節・年ごとに変化を感じながら生活を送ることができる。

中島村立中島幼稚園（福島県）⁴⁾は太陽熱を効率的に利用している。屋根に集熱板を設置し、そこで温められた空気がダクトを通して床下まで送られ、床の吹き出し口から保育室等に送られる。また、太陽光を利用した設備もあり、「ハイサイドライト」¹⁰⁾から太陽の光を取り込んだり、風を通したりする。「ハイサイドライト」とは、高窓採光のことである。見通しや通風などの機能は普通の側窓採光より落ちるが、室内の照度分布の均一性が得られやすく、また、その下の壁面を使えるなどの利点がある¹⁰⁾。

V 改訂のポイントを踏まえた園の各観点への対応

前項Ⅳでは、各観点ごとに、対応の仕方を見てきた。しかし、1つの園が1つの観点にのみ対応しているだけではなく、複数の観点に対応していることも考えられる。そこで、7つの観点到に該当する項目を幼稚園別に対応の有無を分類した。その結果を表1に示す。分析対象とした幼稚園は、文部科学省『これからの幼稚園』5園と1998年以降の『新建築』¹¹⁾⁻¹⁹⁾で取り上げられた幼稚園16園である。

最も多くの園が対応していた観点は「多様な生活体験が可能となる環境の整備」で、16園中

10園が対応していた。逆に、対応している園が少なかった観点は「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続への対応」と「特別支援教育の推進への配慮」であり、それぞれ16園中1園であった。

最も対応している園が多かった観点「多様な生活体験が可能となる環境の整備」については、自然環境に対する意識や子どもの遊びの拡がり・多様性などに対する関心が高いということが考えられる。

また、「多様な生活体験が可能となる環境の整備」同様、「環境面からの持続可能性への配慮」の観点に対応している園も多く、16園中8園が対応していた。これらのことから、環境への配慮への関心は高いと考えられる。特に、この観点では、特に採光や通風などの整備が多く用いられており、暖房や電灯に頼らず自然環境の中で自然と共に暮らすということを重視して設計していると言えよう。

表1 改訂のポイントにおける各園施設設備の分類

	多様な生活体験が可能となる環境の整備	家庭や地域と連携した施設整備の充実	幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続への対応	子どもの体力向上のための空間	特別支援教育の推進への配慮	環境面からの持続可能性への配慮
四街道さつき幼稚園	○	○		○		
ふじようちえん		○		○		○
郡上市立はちまん幼稚園	○	○	○			
高千穂幼稚園	○			○	○	
中島村立中島幼稚園	○	○				○
錦綾幼稚園	○					
かしのき保育園 ¹¹⁾				○		
さつき幼稚園 ¹²⁾						○
西武学園文庫幼稚園 ¹³⁾		○				○
昭和保育園 ¹⁴⁾		○				
認定子ども園和田学園 ¹⁵⁾	○					○
くらさこ保育所 ¹⁶⁾						○
狭山ひかり幼稚園 ¹⁷⁾	○	○		○		
みどりの保育園 ¹⁸⁾	○	○				
まちの保育園 ¹⁹⁾	○			○		○
いわき幼稚園 ⁸⁾	○					○

また、「家庭や地域と連携した施設整備の充実」の観点も、16園中8園と多くの園が対応していた。特に保護者間のコミュニケーションの場を設ける園が多くあり、地域社会の関係の希

薄化が窺われる。そのため、施設を改築する他にも元からある空間や設備を工夫して、保護者同士の関わりや育児の悩み相談の場などを提供することがこれからの幼稚園施設には必要であると考えられる。

「子どもの体力向上のための空間」は16園中6園の対応であった。この観点については、空間の連続性や回遊性、園庭や遊具の配慮といったハード面の整備が求められる部分が大きいと考えられる。そのため、子どもの体力向上のために必要であっても、取り入れることが難しい面があるものと考えられる。

「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続への対応」を取り入れている園はほとんどなかった。これは、幼稚園教育と小学校教育との接続のための空間を施設として設けるのではなく、保育室や遊戯室、小学校の体育館などの場を活用して対応しているのではないかと推測される。この観点については、ハード面ではなく、ソフト面での対応の工夫による対応が可能ではないかと考えられる。

もう1つ対応がほとんどなされてなかった観点は「特別支援教育の推進への配慮」である。特別に支援の必要な子どもたちが増加している一方で、それに対応するための施設・整備を設けている園が少ない。今後、特別支援教育に対応するための施設を設けることが課題となると考える。

さらに、園ごとに見てみると、7つの観点に対して最も多く対応している事例で3つであり、四街道さつき園をはじめ16園中で7園であった。逆に1つの観点にしか対応していないのは、錦綾幼稚園をはじめとした16園中で5園であった。改訂によって加えられた7つの観点全てを考慮して設計されている施設はなく、現時点では、7つの観点中、約半分に対応するのが、ハード面での対応の限界であると言えるかもしれない。

以上のことから、今後は、設計面等のハード面だけでなく、ソフト面の工夫によって、観点への対応を検討していく必要があるものと考えられる。

VI まとめ

幼稚園施設整備指針が改訂されて、2年ほど経つ。しかし、改訂によって建て替えられたという施設はあまりない。また改訂によって加えられた7つの観点全てを考慮して設計されている施設はなく、今回分析した事例では、最大で3つであった。このことから、観点を踏まえて新しく建て替えることや7つの観点全てを考慮することは、建築費用や建築面積の確保、建設中の園児の保育場所の確保など問題点が多く、実現が難しいと考えられる。また、幼稚園施設整備指針が改訂されたからといって、すぐに建て替えや改修が可能な園は非常に少ないと言える。

そのため、今後は、建て直す・改修するという対応の他に、各園でどのような施設の工夫がされているのか、どのような工夫が可能なのかを検討することが必要であると考えられる。

VI 引用文献

- (1) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説』, p84, p135, フレーベル館 (2009年)
- (2) 文部科学省 (中央教育審議会)

子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について ― 子どもの最善の利益のために幼児教育を考える ― (答申) 2005年

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm

(3) 文部科学省(文部科学省大臣官房局文教施設企画部)：『幼稚園施設整備指針』2008年
http://www.mext.go.jp/a_menu/shisetu/seibi/1261368.htm

(4) 文部科学省(大臣官房文教施設企画部施設企画課)『これからの幼稚園施設』2009年
http://www.mext.go.jp/a_menu/shisetu/seibi/1294515.htm

(5) 認定子ども園 四街道さつき幼稚園(千葉県) HP <http://www.kidslink.jp/satuki/>

(6) 錦陵幼稚園(京都府) HP <http://www.kinryo-kids.com/index.html>

(7) 非営利活動法人 日本ビオトープ協会：「ビオトープとは」
<http://www.biotope.gr.jp/>

(8) 『建築英語辞典』：「den」, p487, 彰国社(1978年)

(9) 『新建築』：いわき幼稚園(福島県), p78-83, 2009年3月号

(10) 『建築大辞典』：「ハイ サイド ライト」 p1203, 彰国社(1976年)

(11) 『新建築』：かしのき保育園, p184-189, 2006年3月号

(12) 『新建築』：さつき幼稚園(福岡県), p168-173, 2006年11月号

(13) 『新建築』：西武学園文庫幼稚園(埼玉県), p198-203, 2010年4月号

(14) 『新建築』：昭和保育園(群馬県), p140-145, 2010年10月号

(15) 『新建築』：認定子ども園 和田学園(群馬県), p60-65, 2011年6月号

(16) 『新建築』：くらさこ保育所(広島県), p70-75, 2011年6月号

(17) 『新建築』：狭山ひかり幼稚園(神奈川県), p88-93, 2011年6月号

(18) 『新建築』：みどりの保育園(東京都), p95-100, 2011年6月号

(19) 『新建築』：まちの保育園(神奈川県), p109-104, 2011年6月号